



折り返しにあたって：医学研究科長・医学部長就任 2 年目の抱負

医学研究科長・医学部長 本間 研一



昨年 4 月、医学研究科長・医学部長に就任して早くも 1 年たちました。任期折り返しの時期にあたり、残された課題と今後の展望について述べてみたいと思います。

昨年は国立大学法人化の実体が明らかとなった年で、北海道大学においては、部局に配分さ

れる経常的経費（運営費交付金）が大幅に減少し（前年度比で、平成16年11.6%減、平成17年度9.8%減、平成18年度5.2%減）、本年度は金額にして2.1億円の減配（平成15年度比較）となっています。さらに、教員定員（人件費）5 % の全学留保、事務系職員の削減、運営費交付金の部局傾斜配分などが実施されております。また、本研究科においては、年次進行の研究棟耐震改修が 2 年間中断しました。一方、教員や父母、同窓生、医学部同窓会や病院共済組合の寄附や総長裁量経費による学生サークル室の改修や医学部食堂の移転整備、図書館のバリアフリー化など、前進もみられました。本年度は、技術系職員の事務局一元管理や任期制の導入準備などが予定されています。

このように、法人化後大学における教育研究環境が悪化する中で、現在の教育研究の質を維持し、さらに発展させるために、昨年度は以下に述べる 4 つの改革を提案し、その実施に向けて準備を進めてきました。本年度は、これらの改革を具現化させるとともに、新しい課題に対する対応を検討したいと考えています。

A. 繼続して取り組む課題

1. 教育システムの見直し

1) 大学院教育

平成12年に大学院が重点化されて、早くも 5 年経ちました。大学院重点化とは何だったのか、充分な総括も無いままで、北大では新たな大学院構想として学院・研究院が提唱されています。また、昨年 9 月には中教審から大学院改革に関する答申が出されました。医学研究科では、大学院重点化後 5 年間の教育研究の総括をおこない、それをもとに、大学院教育の目的の明確化、臨床医学研究の促進、融合的教育の推進、スムーズな学位授与、

基礎医学教育者の育成などを目的として大学院再編を構想し、平成19年度概算要求事項としてあげました。さらに、大学院教員の役割を明確にするため、北大病院教員との関係を見直しました。

本年度は、この大学院再編計画に従って、連携講座、連携教員の選考、シラバスの整備、学位審査等施行細則の制定などの作業に入ります。

2) 医学部教育

大学院を重点化したからといって、優秀な医師を育成する医学教育に手は抜けません。むしろ、医学教育に対する様々な観点からの要求は強まる一方です。平成15年度から始まった新カリキュラムの学年進行にともない、顕在化した授業の過密化などの問題を解決するため、学士編入時期を 3 年次から 2 年次後半に移動する案を、平成19年度概算要求事項としてあげました。平成18年度入学生には、いわゆる「ゆとり教育」を受けた初めての学生が含まれています。また、本年度から入試科目として理科を実質 3 科目としました。これらの変化が、学部教育にどのように反映するのか、注目していきたいと思います。また本年度から、学生に医学研究とは何かを知つてもらうとともに、教員や先輩との交わりを促進する意味で、新入生（1 年次）を分野配属する新しい科目を導入しました。

本年度は、新カリキュラムによる臨床実習の実施体制確立と 6 年次のコース制実習のシラバス作成をおこないます。また、学士編入時期の変更にあわせて、生理系カリキュラムの見直しを計画しています。

2. 融合的研究の促進

法人化後、基盤的な教育研究経費の減少と、プロジェクト型教育研究が大学単位で申請する方式へ変化したことにより、部局単位で大型予算を獲得することは非常に難しくなってきました。したがって、医学研究科も学内外の研究機関と協力し、プロジェクト研究の一翼を担う形で研究教育施設の整備を進めていかなくてはなりません。そこで、医学研究科は連携研究センター「フラテ」（学内措置）を設置し、全学的なプロジェクト研究の受け皿となる体制を確立しました。さらに、先端生命科学研究院や人獣共通感染症リサーチセンターなどと部局単位で連携し、共同で大型研究費の申請をおこないました

(特別教育研究経費、先端融合領域イノベーション創出拠点など)。この文章が印刷される頃には、採択結果は出ていると思います。

本年度は、連携研究センターの機構整備と、その拠点となる東北研究棟の耐震改修工事を概算要求によらない方法で行います。また、付属動物実験施設の改修等を検討します。

3. 予算編成における改革

経常的経費として位置づけられる運営費交付金が年々減少していくなか、教育研究の質を維持するために予算編成は従来にもまして重要になっています。昨年度は、分野への配分方法を変更しました。まず、研究科共通経費と分野配分経費をより明確に区別しました。また、教育へのインセンティブを高める目的で、大学院生の数や講義数等の教育実績にもとづき運営費交付金を配分しました。従来、主として財源不足を補う目的で使用されていた研究科長裁量経費を、より積極的な方策にも使用することにしました。その1例が、医学研究科3賞(特別賞、優秀研究賞、優秀教育賞)です。

本年度は、新しい予算編成法を踏襲するとともに、研究科長裁量経費から、東北研究棟耐震改修費に伴う移転経費や諸経費を計上する予定です。また、研究科共通経費の節約を目的として、光熱費の分野ごと目標値を設定し、節電にインセンティブを付けることにしました。

4. 管理運営体制の見直し

法人化後、管理運営が多様化し、書類作成や会議等に割かれる時間が増えています。医学研究科における管理運営の効率化、省エネ化、北大病院との役割分担明確化を目的として、臨床系分野の統合再編、社会医学分野に教授1を配属、教授会構成員規定の整備、教授会審議事項の見直し、拡大研究科教授会の設置を行い、さらに、教員資格の審査をおこなう人事委員会や、入試業務を統括する入試総務委員会、ハラスメント防止委員会の設置、学生論旨規定の設置、教授会審議概要のHP掲載などを行いました。また、人件費削減に対応して教員の再編成をおこない、同時に弊害の多かった臨床形助手ローテートを解消しました。

本年度は、全学委員会との対応を目的とした各種委員会の統廃合を検討します。また、医学教養コースの実質化や教育・研究の国際化に対応する組織を構築する予定です。

5. その他

昨年度は、アメニティー整備の一貫として、医学研究科全館および同敷地内を禁煙区域とし、独立した喫煙室を管理棟一階に設置しました。

本年度は、医学部学生サークル室や医学部食堂、臨床講義棟周辺の環境整備を計画します(実際の整備は東北棟の改修工事後)。また、旧組織学実習室を学生自習室

に改修します。

B. 新しく取り組む課題

新しい課題が次々と出ています。組織改変の移行期には止むを得ないことではありますが、対応に多くの時間とエネルギーがかかりそうです。

1) 教員人事規定の整備

平成19年度から導入される大学教員の役割と呼称の変更に対応すべく、研究科内諸規定の整備を行います。特に、助手(助教)に課せられる任期制の考え方、採用条件、再任条件などを定めます。

2) 医学研究科再開発構想の策定

東北研究棟耐震改修工事(平成18年度実施予定)及び北研究棟の耐震改修工事(平成19年度概算要求事項)に伴い、従来の再開発プランを見直します。また、医学研究科・医学部、北大病院、歯学研究科・歯学部、遺伝子病制御研究所を含むいわゆる医系ゾーンの再開発を検討する委員会を立ち上げます。

3) 医学部創立90周年記念行事

2009年に迎える医学部創立90周年の記念行事として、医学部会館建設、医学部90年史の上梓等を計画しました。医学部同窓会を中心として後援会を設立し、10億円を目指として募金活動を開始します。

4) ハラスメント防止対策

セクシャルハラスメント等の発生防止にむけて、職種別に講習会を開催し、出席を義務化します。

5) 研究・教育インセンティブの強化

サバティカル制度、スタートアップ経費、男女共同参画促進制度の導入に伴い、学内規定を整備します。

6) 医学教育開発室の整備

医学教養コースや医学部教育の充実を図る目的で、医学教育開発室(学内措置)に教員を配置(兼任)し、シラバス作成、一般演習などの科目を担当してもらいます。

7) 国際連携室の設置

研究教育の国際化に対応するため、「国際連携室」(学内措置)を設置し、教員を配置します。国際共同教育研究の促進、姉妹大学などとの国際交流、留学生への対応など、医学研究科の国際化を促進します。

8) 情報管理体制の整備

IT技術の促進と個人情報保護法に対応するために、情報管理体制の整備を行います。また、研究科HPや分野HPの充実をはかり、情報を国内外に発信するとともに、共同研究の促進に資します。

9) 教員と学生との交流促進

長らく続いた学友会運動会を中止し、その代わりに、学部学生の進級時期（2年目前期、3年後期、5年目前期）に合わせて、進級指導とともに、教員と学生との交流を促進する会合と懇親会を企画します。

10) 非常勤講師等の呼称制度の整備

教員呼称の変更や、全学における非常勤教員の呼称に対応して、学内の教員呼称を整備します。

保健学科長就任2年目の抱負

医学部保健学科長 松野一彦



平成17年4月より2期目の保健学科長を務めておりますが、2年目にあたっての抱負を書くようにとの依頼がありました。医療技術短期大学部長から数えますと連続6年目を迎えるわけで、本当のところ「抱負」と呼べるものがあるか疑問です。自治体の長などでの多選の弊害がいわれておりますが、まさにその通りです。医学研究科の改革に燃えて2年目を迎える本間研究科長とは対照的です。と、原稿をここで終えるわけにもいきませんので、保健学科の近況をご報告致します。

平成15年10月に設立された北海道大学医学部保健学科は3年を経過し、本年4月7日の入学式で、保健学科第3期生になる195名（男性86名、女性109名）の新入生を迎えました。内訳は、看護学専攻74名（前期日程60名、後期日程14名）、放射線技術科学専攻41名（33名、8名）、検査技術科学専攻41名（33名、8名）理学療法学専攻20名（16名、4名）、作業療法学専攻19名（15名、4名）です。今年は、例年に比べ北海道内の出身者が多く、北海道外出身者は34名、愛知県7名、静岡県5名、東京都4名、埼玉県3名、兵庫県3名などとなっています。4月11日から、「保健医療概論」などの専門科目と多くの

全学教育科目の講義が始まるとともに、専攻別に大滝セミナーハウスなどに宿泊して研修を行う「新入生合宿研修」が相次いで行われております。また、9月28・29日には北海道大学病院を舞台に「早期臨床体験実習」が予定されています。

保健学科の設置に伴っての年次進行による教員の増員では、平成18年度は看護学専攻を中心に助手の先生4名が増えました。これまでの教員を含め全員で、さらに教育、研究の充実をめざしていく決意です。また、保健学科ではより高度の医療に対応できる専門職医療人の育成をめざして大学院の設置を計画しています。現在は平成20年度に大学院修士課程の設置を準備中で、平成22年度には大学院博士課程の設置も予定しています。

体外的な行事としては、医学部保健学科を志望している高校生・受験生を対象として、7月30日（日）にはオープンユニバーシティ、7月31日（月）には体験入学を開催します。また、市民の皆さんを対象に保健学科での教育・研究内容をご理解いただくための公開講座を9月9日（土）に開催の予定です。

このように、北海道大学医学部保健学科では、日本の今後の医療を支える医療人を育てるべく、全力を尽くして教育・研究に当たる決意でありますので、皆様方のさらなるご支援をよろしくお願ひいたします。

定年退職にあたって

元医学部保健学科教授 下妻光夫



大学卒と同時に苫小牧工業高等専門学校へ奉職して以来39年間の長い期間、教職の場で仕事をすることができ、無事この3月末日を持ちまして定年退職することができました。このことは、偏に皆様のご指導ご鞭撻、ご支援によるものと感謝いたしております。この間、北海道大学工学部電気工学科電気物性工学講座で13年間を、また医療短期大学部19.5年間、更に医学部保健学科放射線技

術科学専攻2.5年間と合計35年間北海道大学に在職をさせていただきました。思い起こしますと、工学部在職時は、70年安保の学生運動が激しい時で学生に校舎を占領され朝出勤すると、職場に入れず工学部前庭で半日を過ごしたり、また自宅待機を余儀なくされたこともありました。この時代を考えると、よきにせよ悪しきにせよ現在の北大生の行動や思想が大きく変化したことを感じざるおえません。医療短大部への職場替えの折には、居室が無く玄関口にパーティションを立てて急ごしらえの研究室で過ごしたこともあります。工学部で扱ってきた大学院生と違い若い学生との交流に戸惑いを隠せず苦労

したことも思い出されます。しかし、研究より教育を優先させることを求められ、教育の重要性や面白さを知られ、結果として医療短大部だけでも20期生約800名もの卒業生を社会へ送りだすことができました。退職後も卒業生との深いかかわりが続いくことと思います。そして卒業生は、私にとって一生の宝物ではないかと感じています。

さて、この39年間の研究面を思いますと、やはり工学部時代の田頭研究室での研究が現在までの研究の礎となっていることが明らかです。文科省の科学研究費を考えても工学部時代の業績の蓄積があったればこそ毎年のように採択され私の研究費の全てと言っても過言でない重要な部分を占めていました。おかげで、それなりの実験的研究を行うことができ、論文数も自分の年齢くらいにはなっており、恥ずかしくないものとすることができます（論文内容は、恥ずかしいかも！）。研究のメインテーマは、「プラズマを使ったナノ薄膜材料生成研究」であり、半導体デバイスへの応用や、切削工具への適用、更に医療材料表面改質など、また最近では薄膜放射線検出器への応用も現実化して来ており北大知的財産本部のお力をいただき特許申請を行っております。これらの薄膜生成新技術の海外移転としてJICA（国際協力事業団）

のプロジェクト「アルゼンチン産業用材料のプラズマ処理」を立ち上げに参加することができました。私は、1993年から1994年に掛けてこのプロジェクトの事前調査を目的に6ヶ月国立原子力研究所（ブエノスアイレス市内）で技術指導し、そして国際協力の一端をも担わせていただきました。このプロジェクトは、1995年から3年間の期限でスタートし、国内各大学・企業の方がアルゼンチンの原子力研究所に出向き現地スタッフの指導に当たっていました。そのプロジェクトが終わった現在も南米各国とのプラズマセミナーが毎年続いている。

このように、これまでの事を書いてみると日本がアメリカに追いつけ追い越せとの掛け声で躍進を遂げていた時代そしてバブル崩壊と社会が大きく変化してきた時に合致しています。私の研究は、その良き時代の中に最盛期を迎えることができ実に幸運であったと思っています。また、この4月から第二の職場（北海道工業大学）を得ることができもう少し教育研究を頑張ってみたいと考えております。

最後になりますが皆様の益々のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げ、また今後の北大の発展を期待しております。

教授就任のご挨拶

病院循環器外科 松居 喜郎



このたび前任の循環器外科初代教授安田慶秀先生の後を継ぎ、4月1日付けで北海道大学病院循環器外科教授を拝命いたしました。

私は昭和29年札幌生まれ現在51歳の道産子です。昭和45年札幌南高等学校を卒業し北海道大学医学部医学科に入学し昭和

55年卒業しました。学生時代は医学部サッカー部に所属し6年間もっぱら勉強以外に精を出していました。卒業後、当時田邊達三教授が主宰されていました北海道大学医学部第2外科に入局し研修させていただき外科医としての一步を歩きはじめました。2年間の学外一線病院での研修後大学にもどり心臓血管外科の研修をはじめました。その後昭和60年フランス・パリ第12大学外科研究センターに留学させていただきLoisance教授のもと成人心臓手術、心臓移植の臨床と心保存、移植の実験を行いました。帰国後昭和62年北海道大学医学部附属病院第二外科助手、平成2年北海道大学医学部外科学第二講座助手として臨床、研究に従事させていただき、平成4年には文部省在外研究員として米国Mayo Clinicにも留学させていただきました。Mayo ClinicではDanielson教授、Puga教授のもと先天性心疾患に対する手術を学ばせていただき、Dr.MorrisのLaboにも通い、代用心筋を負荷

条件に影響を受けにくい心機能指標で評価する実験に参加しました。平成5年には北海道大学医学部外科学第二講座講師、平成6年北海道大学医学部附属病院循環器外科開設に伴い、初代安田慶秀教授のもと、助教授としてお世話になりました。

平成元年に医学博士学位を取得しましたが、学位論文は「下行大動脈遮断中の脊髄虚血予防に関する研究—術中脊髄モニターとしての脊髄誘発電位の応用—」で、脊髄誘発電位を初めて大血管外科領域で応用し、その後臨床応用をすすめ、現在多くの施設で臨床応用されています。大学在籍中は脊髄虚血に関する研究のほか、心保存実験（再灌流障害予防）、心筋保護モニター法の開発、代用心筋の改良、両心室ペーシング法評価などについて研究を行い、さらに当時注目を集めていた拡張型心筋症に対する左室縮小手術（バチスタ手術）の実験的評価を行い、その限界から心筋を切除しない新しい左室形成術として「オーバーラッピング法」を開発し実験的に有効性を確認しました。

平成12年9月に当時恩師田邊達三名誉教授が院長をされていたNTT東日本札幌病院に心臓血管外科開設のため部長として呼んでいただき、心臓外科としては、はじめて大学以外で働くこととなりました。幸い比較的症例数にも恵まれ、前述の「オーバーラッピング法」を臨床応用することができました。一例目の患者さまは、現在もスキー、山登りをされているほどお元気になって

おり、その後様々な改善術式を加え、私のライフワークとなっています。同様の手術を今まで50例以上に施行し、現在全国各地で多数の追試がなされています。

平成16年には縁があり東海大学非常勤教授として東京の池上総合病院ハートセンター長として招かれ心臓血管外科を北海道大学病院循環器外科教室の応援をいただき立ち上げました。NTT東日本札幌病院にも定期的に手術、外来のため通わせていただきました。私にとり道外

での活動は色々な意味で大変有意義でした。

就任1ヶ月ではありますが後輩たちの心臓血管外科医として原石としての光をまぶしく感じています。大学病院を巡る昨今の環境は厳しいものがありますが、自分なりに楽しく、明るい未来展望をもった教室にしていく所存でございます。皆様のご指導、ご鞭撻を宜しくお願ひいたします。

教授就任のご挨拶

病院リハビリテーション科 生駒 一憲



北海道大学病院リハビリテーション科教授に4月1日付けで就任いたしました。病院教授という新設のポストですが、眞野行生教授が作られましたリハビリテーション医学教室を引き継ぐ形でスタートしております。そのリハビリテーション医学教室が誕生したのは平成7年10月

に眞野教授が北海道大学医学部に赴任された時でした。そして、平成8年8月にリハビリテーション科外来が設立、平成9年8月にはリハビリテーション科病棟が開設され、臨床医学教室としての体制が整いました。

私は昭和58年奈良県立医科大学を卒業し、母校で眞野先生のご指導を仰ぎながら、リハビリテーション医学とその基礎となる神経内科や神経生理学の勉強をして参りました。平成13年4月に奈良県立医科大学附属病院リハビリテーション部から北大リハビリテーション医学分野に赴任し、当時厚生労働省が新事業として開始した「高次脳機能障害支援モデル事業」に、支援拠点機関として高次脳機能障害者のリハビリテーションに取り組んできました。本モデル事業は今年3月で終了し、10月からは障害者自立支援法の下、高次脳機能障害支援普及事業として実動し始めます。高次脳機能障害のリハビリテーションでは、医師、作業療法士、理学療法士、言語聴覚士、看護師、ソーシャルワーカー（役割は相談支援コーディネーター）だけでなく、行政、就労支援施設、家族、地域社会などが一丸となって取り組んでこそ成果が上がるもので、リハビリテーションの典型と言えるものです。北大病院リハビリテーション科ではその診療の柱として、高次脳機能障害のリハビリテーションに今後

も積極的に取り組んで行きたいと考えております。

高次脳機能障害のリハビリテーションでは、今ある能力を如何に有効に使って障害を克服するか、ということにアプローチの主眼を置くことが多いのですが、リハビリテーションのもう一つの視点として、今の能力 자체を向上させることで障害を克服するというものがあります。この観点に立って取り組んでいるのが脳卒中片麻痺に対する経頭蓋磁気刺激療法です。健側の脳に低頻度で磁気刺激を与えることで健側脳が抑制され、このことにより脳梁を介した患側脳への抑制が減弱し、運動機能の改善につながるというので、リハビリテーション訓練と組み合わせることにより効果が持続します。現在、その刺激方法などについて検討を重ねており、臨床応用を目指しております。その他、北大病院リハビリテーション科での特徴的な取り組みとしては、神経変性疾患への経頭蓋磁気刺激治療、摂食・嚥下リハビリテーション、ポリオ後症候群、筋電義手などがあります。

以上のような取り組みも含めて、私は大学病院に求められる高度なリハビリテーション医療の提供を通じて北大病院に寄与できることを第一に考えておりますが、さらに卒前教育、卒後教育にも力を入れたいと思います。現在、道内の専門医は46名に過ぎず、明らかに不足しております。この状況を解消して道内のリハビリテーション医療が充実すべく、学生や研修医にリハビリテーションの重要性を説き、一人でも多くの専門医が誕生するよう指導致したいと思っております。

最後になりましたが、リハビリテーション科は諸先生のご協力なくしては成り立たない診療科です。引き続きご指導、ご鞭撻いただきます様、よろしくお願い申し上げます。

北海道大学医学研究科連携研究センター「フラテ」の設置について

副研究科長（運動機能再建医学分野） 安田 和 則



1. 設置の背景

北海道大学大学院医学研究科は開学以来、本学で培われてきた「開拓者精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」、「実学の重視」の基本理念に沿い、基礎および臨床医学の様々な領域において大きな業績を上げてきました。これらの研究活動は個々の

研究者の努力によるものであり、今後もそれらの更なる発展を願うものです。時に、世界の生命科学研究領域はゲノムプロジェクト終了後、一気に多様化し多方面に拡大しつつあります。我が医学研究科における研究には、時流に流されない堅実な知の探求と飛躍的に未来を切り開く大胆な知の創造の両者が求められております。一方、国家予算における文教費の削減に伴う運営費交付金や教員数の大幅削減など、我が医学研究科を取り巻く内外の教育・研究環境はますます厳しさを増しており、その中で医学研究科は苦しい運営を迫られています。このままでは個々の研究者の研究活動にも悪影響が及ぶことは必至であり、医学研究科は組織としての戦略的対策を迫られています。

その対策の一つとして、言うまでもなく国家的規模の大型外部資金の積極的な獲得が必要です。これは個々の研究者の優れた研究活動を基盤とするものであることは言うまでもありません。しかし医学研究科は組織としてそれを様々な角度から支援することが必要です。現在の国策としての第3期科学技術基本計画においては、「飛躍知の発見・発明」、「科学技術の限界突破」、「イノベーション」、「子供から高齢者まで健康な日本の実現」などが重要な目標になっており、これらの目標達成に医学研究の占める役割は極めて大きいと考えられます。しかしその一方で第3期科学技術基本計画における投資は、これまでのいわゆる政策課題対応型重点4分野（ライフサイエンス、情報通信、環境、ナノテクノロジー・材料）の中からさらに絞り込まれた融合的課題に対して行われることになっています。したがって我が医学研究科としては単独組織として何かを考えるだけではなく、積極的に北海道大学へ働きかけ、大学全体としてこれらの戦略的研究に貢献できる研究体制を整えさせることが必要であります。

そこで医学研究科は、北海道大学内のあらゆる部局、あるいは学外他の研究機関や企業と連携して医学研究における大胆な知の創造を追及し、広い領域の科学技術の成果を医療や健康維持活動分野におけるイノベーションへ発展させるための研究を行うことを目的とした北海道大学医学研究科連携研究センター「フラテ」を設置しました。ちなみに、フラテとはイタリア語で同胞を意味します。

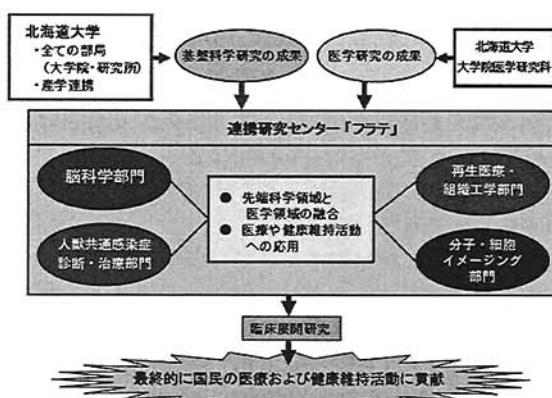


図1：連携研究センター「フラテ」の目的

2. 北海道大学医学研究科連携研究センター「フラテ」の概要

本連携研究センターは、北海道大学内外の様々な連携から生まれた基盤生命科学研究の成果と医学研究科で行われた基礎あるいは臨床医学領域の成果とを融合した先端医学研究を行い、最終的には臨床展開研究を通して国民の医療や健康維持活動に貢献することを目的とします（図1）。本連携研究センターが医学研究科全体の研究体制における役割としては、医学研究科の基幹分野が主として比較的長い堅実な知の探求を行うのに対し、本連携研究センターは「大胆かつ飛躍的な知の創造」を目指すためのプロジェクト研究を担当することになります。北海道大学医学研究科連携研究センター「フラテ」の運用内規等についてはすでに制定されています。以下にその骨子を概説させていただきます。

連携研究センターは空間的にも機能的にも北海道大学病院と密接な連携を必要とします。したがって施設には医学研究科東北研究棟、北海道大学病院管理棟内医学研究科施設、および附属動物実験施設を当てています。これらの施設は今後の改修を経て、連携研究センターの機能を備えた施設となっていく予定であります。現在、医学研究科東北研究棟は18年度内に改修を行える目処が立ちました。ここで既存の縦割り組織から離れた部局横断的な融合研究を保証するために、これらの施設内には十分なスペースのオープンラボを配置し、外部資金を活用したプロジェクト研究等の効率的な実施を可能にする予定です。

近年、北海道大学では脳科学研究教育センター、科学技術振興調整費戦略的研究拠点育成プログラム「北大リサーチ & ビジネスパーク構想」、人獣共通感染症リサーチセンターなどの融合型大型プロジェクト研究が全学的規模で推進されており、医学研究科では各研究者レベルでこれに参画し、多くの業績を上げてきました。これらのプロジェクトはいずれも第3期科学技術基本計画における主要な研究テーマであり、これらの領域における研究体制の再編や整備は緊急の戦略的課題です。そこで本連携研究センターの設立においては、これら戦略的大

型プロジェクト研究と連携した脳科学部門、再生医療・組織工学部門、人獣共通感染症診断・治療部門、分子・細胞イメージング部門の4部門を設置することにしました。これらの部門では医学研究科と他部局および企業との領域融合・产学連携研究を展開します。

各部門には、複数の基盤分野（期限5年、5年の延長は可）と連携分野（期限5年、延長は不可）をおきます。基盤分野の人的原資は、医学研究科の基幹分野から拠出（兼任）します。連携分野の人的原資および運営は外部研究資金によるものであり、その人的原資には全学運用定員の獲得も目指しております。

各分野は現時点（5月8日現在）ではまだ決まっていませんが、まもなくこの選考が始まる予定です。

3. 終わりに

本連携研究センターは、長期的展望に基づいた基盤的研究と目標を設定した戦略的研究を融合するプラットフォームであり、基礎的研究成果を直接医療に結びつける渡し舟であります。全学的な研究プロジェクトのなかで、本連携研究センターはその医学・医療への出口に相当する研究を担当します。医学・医療に関する研究・教育を主務とする医学研究科が中心となって、北海道大学におけるこれらの分野の研究環境の整備を推進すること

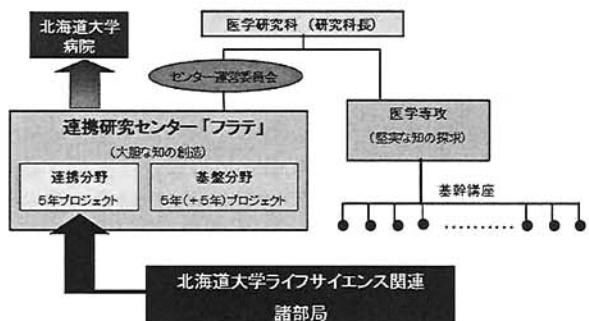


図2：連携研究センター「フラテ」の概要

は、現在北海道大学が推進している構想とも、また国策とも合致するものと考えます。施設に関しては現時点ではバーチャルでありますが、これは今後の改修計画が進むにつれて、その形が明確になります。一方、その機能はすでに現実のものであり、大型外部資金獲得のために有効に作用しております。その成果についてはすでに形となりつつありますが、その詳細については次に機会に譲りたいと思います。どうか北海道大学医学研究科連携研究センター「フラテ」にご理解とご支援をいただけますよう、この紙面をお借りしてお願いを申し上げます。

寄附講座紹介 「時間医学講座」

時間医学講座助教授（兼任） 本間さと

また4)中国など、近隣のアジア諸国との連携し、時間医学の啓発に努めるとともに、留学生を受け入れることも課題としております。

これらの研究を通じ、現代社会の下で起こる生活リズムの乱れや、不適切な光環境が生み出す生体リズム障害に立ち向かう手段を提供し、健康な生活の指針を打ち出すと共に、発光プローブやシングルセル分子イメージングシステム等の技術開発は、広範な研究領域にも貢献するものとなります。今後5年間の教育研究から、時間医学に精通した医師、研究や教育者の育成と共に、近隣諸国との学術交流を通じて、時間医学の啓発や国際交流に資するよう努める所存です。



生物発光によるシングルセルイメージング解析装置と
時間医学講座の4名のスタッフ

- 1) 生物時計機能の変動をナノテクノロジー、生物発光イメージング等の先端技術を駆使して測定解析し、時間医学の基礎研究を推進する。
- 2) ヒトの生物時計機能の測定解析を行い、分子・細胞レベルでの個体特性を検討すると共に時間医療・時間薬理への応用を図る。
- 3) ヒトの生体リズム研究に関連するデータベースを作成する。

平成17年度医学研究科・医学部医学科

「優秀研究賞」、「優秀教育賞」、「特別賞」受賞者の紹介

医学事務部事務課

平成17年度医学研究科・医学部医学科教職員・学生等の顕彰内規に基づく各賞の受賞者が決定し、平成18年3月20日（月）医学研究科第3会議室において、授賞式並びに祝賀会が行われました。

優秀研究賞は、顕著な研究業績をあげた専任教職員に、優秀教育賞は顕著な教育業績をあげた専任教職員に又、特別賞は国内外において顕著な社会貢献をされた方々に対し授与したものです。

受賞された3氏のご紹介をいたします。



《優秀研究賞》

渡邊 雅彦 教授

(解剖発生学分野)

研究業績の名称：

「小脳シナプス回路網の競合的発達を抑制する分子機構の解明」
(推薦者：岩永 敏彦 教授)

優秀研究賞を受賞した渡邊雅彦先生の業績は「小脳シナプス回路網の競合的発達を制御する分子機構の解明」で、協調運動や学習運動の成立に重要な小脳プルキンエ細胞のシナプス回路網が、どのような分子機構により発達成熟するかを、分子生物学的手法を用いた形態生物学的解析により明らかにされました。特に、グルタミン酸受容体の1つである δ 2が、平行纖維と結合するプルキンエ細胞棘突起にのみ選択的に局在し、シナプス形成を強化するとともに、登上纖維支配を抑制することを証明しました。これらの一連の研究は、年少期の感覚・運動の経験や訓練が、個人が獲得する能力や到達レベルを決定する可能性を実験的に示したもので、社会的にも大きな意義があります。先生は、平成17年度にNature Neurosciを始めとする世界的にも評価の高い雑誌に合計16編の論文も発表しており、その業績には目を見張るものがあります。



《優秀教育賞》

前沢 政次 教授

(医療システム学分野)

教育業績の名称：

「地域基盤型プライマリ・ケア教育の推進」
(推薦者：吉岡 充弘 教授)

優秀教育賞を受賞した前沢政次先生の業績は、「地域基盤型プライマリ・ケア教育の推進」です。先生は、本学において早期臨床演習（ECE）実施委員会の委員長として尽力されてきましたが、特筆すべきは、それまで大規模病院での演習が主であったものを、あえて小規模病院や診療所などに学生を派遣し、臨床医としての適正度自己評価を学習できる体制を作ってきたことです。受賞の直接の対象となった業績は、平成16年度から導入された新カリキュラムにおける診断学入門Ⅰ、Ⅱの実践です。ここで先生は、医学の医の字も知らない入学2年目の学生を対象として、コミュニケーション技法や家庭訪問による健康診断実習など、患者の訴え、相談などを適切に把握する能力の向上にむけた、ユニークな授業を開発し、この授業はプライマリ・ケア教育のモデルとして全国的にも注目されています。



《特別賞》

道下俊一 先生

(町立浜中診療所名誉所長)

社会的貢献の名称：

「地域医療への貢献—北辺のへき地で47年間、町民の健康を1人で護り続けた功績—」
(推薦者：松本脩三 名誉教授)

特別賞を受賞した道下俊一先生の業績は「北辺のへき地で、47年間、町民の健康を1人で守り続けた」による地域医療への貢献です。先生は、昭和25年3月、北海道大学医学専門部を卒業後、第二内科に研究生として入局し、昭和26年11月に医師国家試験に合格。その後、昭和28年、道東の浜中町霧多布の日本赤十字診療所に赴任しました。当初は、十勝沖地震による災害復興の一環としての伝染病対策が任務であり、1年間の出張の予定であったとのことです。推薦者である松本脩三名誉教授によれば、「ほとんど休診のない24時間体制の日々を送って1年の月日が過ぎたとき、帰札の荷造りをはじめたが、玄関に座り込み「居てけれ」と叫ぶ患者達の悲痛な引き止めに1年また1年と延ばざるを得なかった」そうです。結局、その後47年間にわたり地域医療を1人で守り、その間の苦労や困難、また感激については先生の数々の著書や講演で広く世の知るところとなっています。このように、北大の卒業生に地域医療の先駆者を得たことは、まことに本学の誇りとするところです。

医学部食堂・医学部学生サークル室の改修工事完了

医学事務部事務課

医学部食堂及び医学部学生サークル室の整備事業（改修）がこのほど完了いたしました。食堂及びサークル室の整備にあたっては、平成16年9月に医学部食堂及び医学部学生サークル室整備事業後援会を設立し、関係各位にご寄附をお願いし、改修費用の一部とさせていただき改修工事に着手し、このたび改修工事が完了したもので、去る4月3日、関係者を招き改修の成了した食堂及びサークル室を披露し、引き続き食堂において祝賀会を開催し竣工を祝いました。

食堂（旧MRⅠ棟）の改修工事は、昨年12月に着手し、本年3月29日に完了しましたが、旧食堂の面積が139m²のところ改修後は395m²と約3倍の広さとなり、席数も55席から113席と約2倍に増えました。食堂の中には、食堂ホール、購買部、厨房、食品庫、事務室及び倉庫等が設けられていますが、この棟には食堂の他に文系サー



医学部食堂

クル室としてミーティングルーム2室を併設しました。改修を終えた食堂は、本年4月3日から営業を開始いたしました。

また、学生サークル室（旧RⅠ棟）の改修工事は、昨年11月に着手し、本年2月27日に完了しましたが、旧学生サークル室の面積が216m²のところ改修後は400m²と約2倍の広さとなりました。サークル室の中には、ミーティングルーム4室、共同機材庫4室、トレーニングルーム1室、男子更衣室及び女子更衣室各1室が設けられています。

医学部医学科には公認団体として、文化系が4サークル、体育系が19サークルの合わせて23のサークルがあり、これらのサークルが改修後のサークル室を有効に使用し、様々なサークル活動を活発に展開されるものと期待されます。



学生サークル室

お知らせ

◆ 第25回 高桑榮松奨学基金授与式の挙行 ◆

北海道大学大学院医学研究科・医学部高桑榮松奨学基金要項に基づく、奨学金及び奨励賞の授与式が去る3月14日（火）11:30～副研究科長室において挙行されました。優秀な学生に授与される奨学金は、6年次総代濱岡早枝子さん、大森優子さんのお二人に授与されました。

なお、若手研究者に贈られる奨励賞受賞者は、次の3名の方々です。

病院神経外科助手 矢野俊介
〃 循環器内科医員 石森直樹
〃 第一外科医員 山下健一郎

◆ 平成18年度 大学院入学状況 ◆

博士課程

専攻区分	定員	入学者数	うち留学生
生体機能学	20	2	
病態制御学	30	43	
高次診断治療学	24	20	
癌医学	12	16	1
脳科学	14	6	
社会医学	10	6	
計	110	93	1

修士課程

専攻区分	定員	入学者数	うち留学生
医学科	20	30	0

平成19年度の募集要項は6月中旬に印刷公表する予定です。また、医学研究科・医学部ホームページでも併せて公表する予定です。

募集要項の請求は6月中旬以降に大学院係あてに行ってください。

◆ 平成18年度 医学部入学状況 ◆

平成18年度の北海道大学入学式が去る、4月7日(金)午前10時から札幌コンベンションセンターにおいて、午後2時からは医学科入学式が臨床大講堂において挙行されました。医学科入学式では、本間医学部長の告辞、宮坂北海道大学病院長の祝辞の後、入学生を代表して、青砥悠哉君が入学者宣誓を行いました。
医学部の入学者は、医学科95人、保健学科195人の計290人で内訳は、次のとおりです。

医 学 科	試験区分	入学者数	内 訳		
			道内高校出身	左記以外	現 役
	前期日程	80 (14)	25 (5)	55 (9)	24 (6)
	後期日程	15 (4)	7 (4)	8 (0)	10 (3)
	合 計	95 (18)	32 (9)	63 (9)	34 (9)
	【参考：17年度】	95 (13)	31 (5)	64 (8)	22 (3)

		試験区分	入学者数	内 訳		
				道内高校出身	左記以外	現 役
保 健 学 科	看護学	前期日程	60 (49)	52 (44)	8 (5)	40 (36)
		後期日程	14 (12)	11 (10)	3 (2)	7 (7)
	放射線技術科学	前期日程	33 (6)	26 (4)	7 (2)	15 (4)
		後期日程	8 (3)	7 (3)	1 (0)	5 (1)
	検査技術科学	前期日程	33 (18)	25 (14)	8 (4)	15 (10)
		後期日程	8 (5)	4 (3)	4 (2)	4 (3)
	理学療法学	前期日程	16 (6)	13 (5)	3 (1)	10 (5)
		後期日程	4 (1)	0 (0)	4 (1)	2 (1)
	作業療法学	前期日程	15 (6)	7 (5)	8 (1)	9 (4)
		後期日程	4 (3)	3 (2)	1 (1)	2 (2)
	計	前期日程	157 (85)	123 (72)	34 (13)	89 (59)
		後期日程	38 (24)	25 (18)	13 (6)	20 (14)
	合 計		195 (109)	148 (90)	47 (19)	109 (73)
	【参考：17年度】		194 (116)	123 (75)	71 (41)	96 (62)

◆ 第100回 医師国家試験合格状況 ◆

医師国家試験早期化2年目の第100回医師国家試験合格者について、去る3月29日(水)厚生労働省から発表されました。

本学部の合格状況は、受験者108人、合格者95人、合格率88.0%でした。新卒・既卒の内訳等は次のとおりです。

	受験者	合格者	合格率	全国平均合格率
新卒	97人	89人	91.8%	93.9%
既卒	11人	6人	54.5%	57.3%
合計	108人	95人	88.0%	90.0%

今年度の合格率は、残念ながら新卒・既卒共に全国平均を下回り、全国医学部80学部中58位の結果となりました。

なお、既卒者で合格した方は、17年3月卒業者4名、平成16年3月及び平成14年3月卒業者各1名の合計6名でした。

◆ 平成17年度 大学院学位授与状況 ◆

博士課程修了者については、短期修了者3名、平成16年度単位修得退学者4名を含む98名が学位を授与しました。論文博士については、17名が学位を授与しました。

修士課程の学位授与者34名のうち、7名が引き続き本研究科の博士課程に進学しています。

課 程	専 攻	学 位 授 与 者 数			
		6月30日	9月26日	12月26日	3月24日
博 士 課 程	病 理 系				
	内 科 系				4
	外 科 系		2		1
	生 体 機 能 学			1	3
	病 態 制 御 学	1	2		40
	高 次 診 断 治 療 学			4	19
	癌 医 学			1	9
	脳 科 学				3
	社 会 科 学	1	1	2	4
修 士 課 程	計	2	5	8	83
	医 科 学			34 (3月24日授与)	

◆ 医学部学士学位記伝達式 ◆

平成18年3月24日（金）午前10時から大学主催の学位記授与式に引き続き、午後1時から本学部臨床大講堂において、学士学位記伝達式が挙行されました。

伝達式では、本間医学部長から卒業生一人一人に学位記が手渡され、次いで、本間医学部長の告辞、斎藤医学

部同窓会会长の祝辞の後、卒業生を代表して、総代の濱岡早枝さんから答辞が読み上げられ、6年間の感謝の意と新たに医師・医学研究者として羽ばたく決意が述べられました。



◆ 平成18年度 医学科新入生合宿研修 ◆

平成18年度の医学科新入生合宿研修が、4月8日～9日の2日間大滝セミナーハウスにおいて実施されました。

メンタルヘルスケアやアルコールの正しい飲み方

(パッチテスト)などの講演や履修ガイダンスなどが行われ、新入生歓迎実行委員の2年次学生と共に、終始和やかな雰囲気で実施されました。

◆ 平成17年度 財団法人から各種助成の採択状況 ◆

(単位：千円)

財 団 法 人 等	種 別	件 数	交 付 金
(財) 伊藤医薬学術交流財団	交流助成金	4	300
"	学会等助成金	2	500
(財) 日本損害保険協会	研究助成金	1	1,000
(財) 北海道科学技術振興センター (ノーステック財団)	若手研究補助金	3	400
	研究開発シーズ補助金	1	2,000
(財) 武田科学振興財団	研究助成金	1	2,000
(財) 持田記念医学振興財団	研究助成金	1	1,000
(財) 金原一郎記念医学医療振興財団	研究助成金	1	400
(財) かなえ医薬振興財団	研究助成金	1	1,000
(財) 内藤記念科学振興財団	研究助成金	1	2,000
(財) 寿原記念財団	研究助成金	1	2,000
(財) 安田記念医学財団	研究奨学金	1	500
(財) 大阪癌研究会	研究助成金	1	500
(財) 総合健康推進財団	研究助成金	1	700
(財) 上原記念生命科学財団	研究助成金	2	5,000
"	研究奨学金	2	2,000
"	海外留学助成金	1	2,900
(財) 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団	研究助成金	1	2,000
(財) 中富健康科学振興財団	研究助成金	1	1,000
(財) 日本リウマチ財団	研究助成金	1	1,000

※ 医学研究科・医学部で把握している分のみ掲載

◆ 医学研究科・医学部事務組織の改組 ◆

平成18年4月1日から、事務組織が改組され、「医学研究科・医学部事務部」は「医療技術短期大学部事務部」と統合し、『医学事務部』となり。これに伴い医学事務部に「事務課」が置かれることになりました。

なお、統合により医療技術短期大学部事務部は、平成18年3月31日をもって廃止となります、同短期大学部が廃止されるまでの間（～H19.3.31）本学組織規則の附則をもって存続することになります。

医学研究科・医学部事務部		医学事務部事務課
改組前（平成17年度）		改組後（平成18年度）
事務長		事務部長（事務課長兼務）
事務長補佐		事務課課長補佐
庶務係 専門職員【研究協力担当】		※ 専門員（教務第二係長兼務） 庶務第一係 専門職員【研究協力担当】
人事係 教務係		※ 庶務第二係 人事係 教務第一係
大学院係 専門職員【教育課程担当】		※ 教務第二係 大学院係 専門職員【教育課程担当】
経理係		経理係
用度係		用度係
営繕係 専門職員【財産管理・施設担当】		営繕係 専門職員【財産管理・施設担当】
図書整理係		図書整理係
図書閲覧係		図書閲覧係

医療技術短期大学部事務部		医療技術短期大学部事務部
改組前（平成17年度）		改組後（平成18年度）
事務長		事務長
庶務係	※ 専門員（教務第二係長兼務）	医学事務部
学務係 (図書室)	※ 庶務第二係	事務課から
会計係	※ 教務第二係 (図書室)	兼務

注1) 医療技術短期大学部事務部の事務長は、同短期大学部が廃止されるまでの間、存続します。

注2) 事務長を除く医療技術短期大学部事務部の職員は、医学事務部事務課からの兼務となります。

注3) 庶務第二係及び教務第二係は、医学部保健学科と医療技術短期大学部に係る事務を所掌します。

編集後記

この度、医学研究科／医学部東北棟の裏にあった旧R I施設が改築され、学友会学生サークル室として生まれ変わりました（本号掲載記事）。各サークルの学生は、これまでよりも広い設備の整った部室に近々移り住む予定です。かつて東北棟地下1階に存在した学生サークル室は、階段をおりると汗と埃がまざったようなすえた匂いがする場所でした。しかし、その中で、時に激論をかわし、はめをはずして騒ぎ、切磋琢磨した記憶は、多くの医学部サークル関係者にとって今でも何物にも代えがたい宝物に違いありません。あの廃墟のような部室がもうないことには一抹の寂しさを禁じえませんが、改修後のサークル室がおおいに有效地に利用されて、学生の皆さんのがより充実した学生生活を送ることができるよう、O Bのひとりとしてこれからも応援してゆきたいと思います。医学部サークルに新しい時代の到来を予感します。
(石津 明洋)

— Home Page のご案内 —

医学研究科／医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付けメールアドレスは、

kouhou-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部

発 行 北海道大学医学研究科広報編集委員会
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

連絡先 医学事務部事務課庶務第一係
電話 011-706-5003

編集委員 神谷 温之、西村 正治、高橋 光彦
石津 明洋、田中 真樹、佐藤 松治